

やっぱり

日本画が好き

2024

月刊 アートコレクターズ

The Pleasure To See.
The Pleasure To Buy.

Art Collectors'

やっぱり
日本画が好き
2024

天野一夫

寄稿

行近壯之助 ×

長谷川喜久

対談

智内兄助

インタビュー

1

January
2024 NO.178

智内兄助

「過剰」な装飾に宿る 日本美術のエネルギー



卷之三

——近年は鶴をよく描かれて います
よね。

モチーフへのこだわり

——近年は鶴をよく描かれています
よね。

2019年に、海外のコレクター
から依頼があり描くようになりまし
た。鶴は昔話にもよく出てくるよう
に擬人化しやすいので、描いている
うちに感情移入して、最終的には家

内の姿を重ねるようになりました。
以来、お気に入りのモチーフの一つ
です。

——昔はご息女でもある久美子さん
を継続的に描かれてきました。
駆け出しの頃はモチーフをコロコ
ロ変える癖があつたのですが、一つ
のテーマとして追いかけられるモチ
ーフを探した結果、行き着いたのが

そういう姿から徳岡神泉の「狂女」も想起されました。今思えば相当感情移入をしていましたのだと思います。娘「久美子」を通して、あの世とこの世を行き来しているかのような彼女の不思議な感じを表現していまし
た。

が流れていると言わされました。思えば「過剰さ」に美を見出して、執拗に描き続けるところが、その血の正体だったのではないでしょか。

——智内さんの描く苦も、これでもかというほど鮮やかに青々と生い茂っていますが、それも過剰さの一つなのですね。

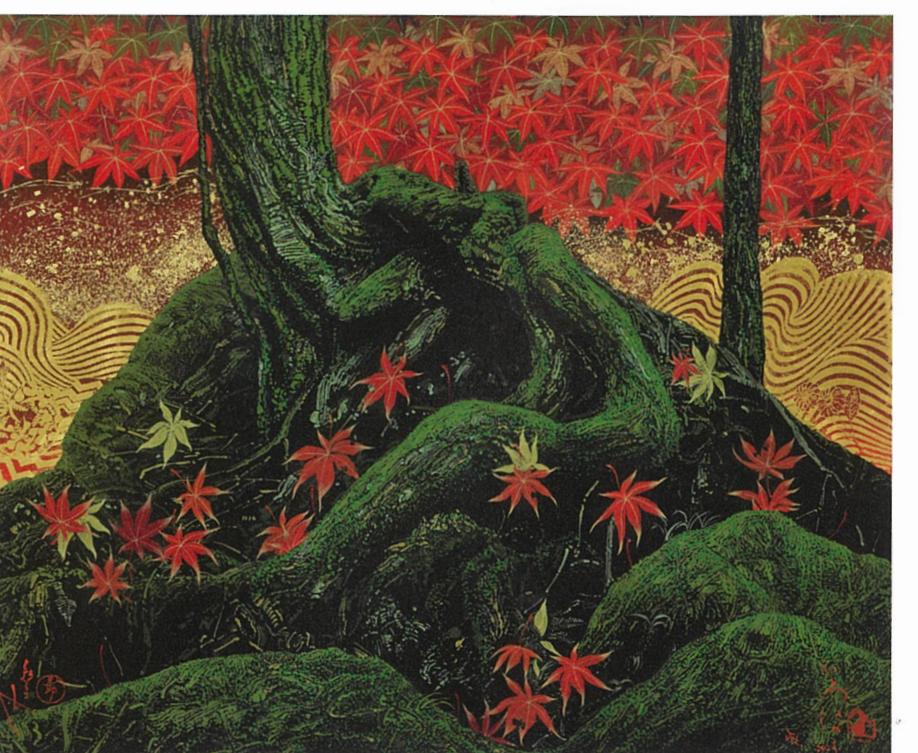
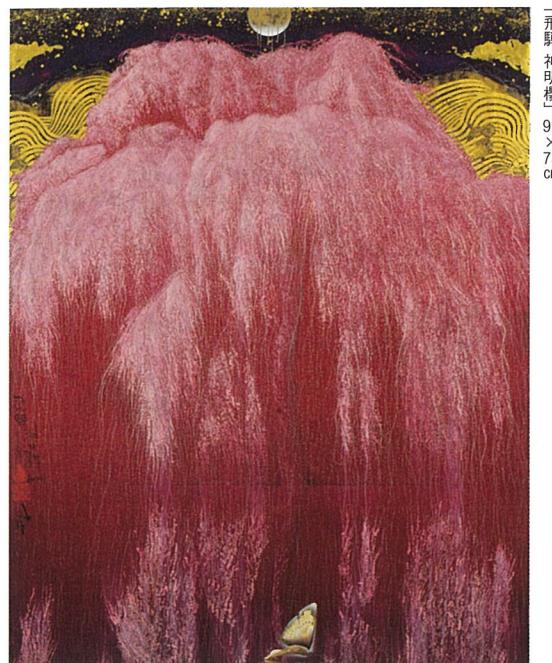
This image shows a vertical strip of dark-colored fabric with a repeating geometric pattern. The pattern consists of white hexagons containing stylized floral or leaf-like motifs. The strip appears to be a fragment of a larger garment, as evidenced by a small tear and some fraying at the bottom edge.

A vertical decorative panel featuring a repeating pattern of stylized, swirling, cloud-like motifs in gold or cream against a dark background.

娘でした

娘を描くといつても脳裏には別の女性を思い浮かべていたりもします。

れているものは美しい。天に向かつて健康的に伸びていくのではなく、地に向かつて落ちていくというのは



け、今にポツと現れた昔の美しさを表現しようと思うと、のように濃くない。そもそもですが、古さを感じさせるものが好きです。だから食器一つにしても骨董市などで古いものを見繕つてきます。

あとは鳥なら鶴、花なら牡丹のように量感のあるものも好きです。例えば紅葉にても集まつて咲き誇っている様子を描きますし、細い枝に

チラチラと付いているのはあまり好みではありません。山が真っ赤に燃えているように咲き乱れる紅葉の過剰には生命の煌めきを感じます。しかし、それを描き切るには体力がりますから、自分自身の肉体にも生命力が漲つていないといけませんね。

運命を変えた学園紛争

——そもそも智内さんは東京藝術大学では油絵を学ばれ、日本

美術というよりも西洋美術に影響を受け

幼少期から西洋画が好きで、藝大に進学を決めた時も油画以外の選択肢は考えていませんでしたよ。

幼少期から西洋画が好きで、藝大に進学を決めた時も油画以外の選択肢は考えていませんでした。しかし、学園紛争で授業が軒並み中止になる中、当時唯一授業が行われていた日本画科に顔を出し、友人の有元容子らの制作を見ていくうちに、日本画に興味が湧いてきたのです。箔貼りや胡粉の溶き方一つとっても、日本料理で出汁をとるように丁寧に手間をかけてやつてている。

——そもそも智内さんは東京藝術大学では油絵を学ばれ、日本美術というよりも西洋美術に影響を受けましたよ。

そういう歴史を目の当たりにして、今更日本人がこのフィールドで体の凄みはありありと伝わってきました。そういう歴史を目の当たりにして、今更日本人がこのフィールドで

闘う必要があるのかと思い知らされましたね。そして、自分にとつてのネイティブとは何かを考えたときに、藤原仏画に代表される日本美術に行き着きました。その時代の職人たちの技術は相当なものでした。

例えば線の美しさ一つをとつて積み重ねに裏付けられた自信が画面にはつきりと現れていました。そういう技術と豊かさが生きています。その時代の職人たちの技術は相当なものでした。

積み重ねに裏付けられた自信が画面にはつきりと現れていました。そういう技術と豊かさが生きています。それは今の日本美術にはあったのですが、江戸時代になると幕府が美術を統括するようになり、狩野派を中心とした粉本主義が蔓延するなど、技術しか残らずどんどん衰えていきます。それは今の日本画にも通じるのではないかでしょう。苗字ばかり後生大事にして、マンネリズムから逃れられなくなっているような気がします。大学での徒弟制度が根強く残っている弊害もあるのでしょですが、先生の真似をしなくては自分の中から湧いてくるものを描くと、絵も自然と豊かになります。大学での徒弟制度が根強く残っている弊害もあるのでしょですが、先生の真似をしなくては自分の中から湧いてくるものを描くと、絵も自然と豊かになります。

子どもの可能性

——智内さんは近年、アトリエのある蕨市の小学生を対象にしたワークショップも盛んに行われています。

その所作がなんともいえず美しくて、云々ではありません。山が真っ赤に燃えるように咲き乱れる紅葉の過剰には生命の煌めきを感じます。しかし、それを描き切るには体力がりますから、自分自身の肉体にも生命力が漲つていないといけませんね。

——描くべきモチーフとして思い定めた幼少期の記憶とはどのようなものなのでしょうか。



1948年愛媛県生まれ。東京藝術大学大学院修了。1980年代初めから、和紙にアクリルで描く画法を確立し、日本画と洋画との境界を越えた革新的な表現方法に到達。日本の伝統美である衣装文様や花鳥風月を用いた「もののあはれ」を基調としたその作風は、独特の技法とあいまって智内独自の幻想世界を創り上げている。